

巻頭エッセー

『ハチドリの話』から

1887年から1889年の二年間、マルティニク島に滞在したラフカディオ・ハーンは、現地の民話を多く採話し、『三倍すてきなお話 (Trois fois bel conte)』などの本で紹介している。そのなかの一つに、「ハチドリの話」がある。先日、立命館大学で開かれた環カリブ文化研究会で、この話が会のテーマのひとつとなった。発案は、小泉八雲『クレオール物語』(講談社現代文庫)でこの民話をクレオール語から直接訳出している西成彦さんだ。

話の大筋はこうだ。あるとき、神様が奴隷(nèg)を使って道路の普請をしようとする。ところが奴隷たちは太鼓(tambou)がないと働けないと言いだす。しかも、この地上にそんな太鼓をもっているのは、ハチドリ(Colibri、クレオール語ではKoulibri)ただ一人なのである。そこで神様は、この太鼓を求めて、まず馬を使いにおだす。太鼓を貸すことをことわられたら、無理やりにでもとってくるようにという命令だ。しかし馬はあえなく撃退される。そこで次にハチドリを訪れるのは牛。角を武器にして今度こそ太鼓を奪取するはずが、牛も撃退されてしまう。毎回ハチドリの闘いを鼓舞するのは、その家来(nèg)である蛙が叩く太鼓だ。しかし、三度目に「鎧魚(pouesson armé、日本で言うハリセンボンのことだ)」がやってきたときには、ハチドリはすでに大いに消耗していて、蛙の必死の太鼓にもかかわらず、ついに力尽き、太鼓を奪われたうえ、首を切り落とされ、その首は岩の下に埋められてしまう。また、蛙はこの敗北の折にそれまで生えていた尻尾を失ってしまうのだ。

この話を、奴隷制の島の歴史を見事に凝縮した民話として読むことは容易いだろう。神様＝農園主は、自由の象徴であるハチドリから(そう、鳥はいつだって自由の象徴でありうるのだから)、アフリカ由来の抵抗の文化を表しもう太鼓を奪い取り、農園の奴隷制のなかに回収してしまう。ハチドリは、農園主に所有されている家畜である馬や牛を退けることに成功するけれど、家畜ではなく海からやってきた武装した魚(ここにフランス本国からの武力を重ね合わせることはごく自然だ)によって殺害されてしまうのだ。

ところで、興味深いのは、この民話が、エメ・セゼールの主催する『トロピック』誌の1942年の第4号に再録されていることだ。セゼールとルネ・メニルの二人の署名があるまえがきでは、まさにこの民話が奴隷制に対する戦いの敗北の物語として提示されている—「ハチドリはたしかに死んでしまったし、蛙は尾を失ってしまった」、そして、その後に民話の、あるいは島の社会の前面に現れてくるのは、闘うハチドリではなく、狡知によって生き延びるすべを身に着けた「ウサギの大将(Compè Lapin)」であり、島の人々は「集団としての」反抗のモーメントを失い、「うまく切り抜けてゆく(se débrouiller)」ことのできる個人たちと、それができなかった人々に二分されてしまったというのである。

たしかに、セゼールたちの筆致は絶望の色合いを帯びているといえよう。しかし、この歴史ならざる歴史の認識にはまた、セゼールにつづく世代、セゼールとは別の道のりを想像しようとしたグリッサンをはじめとする人々の出発点でもあったのではないか。

たしかに、ハチドリは死んでしまった。けれども、尻尾を失いつつも、太鼓たたきの蛙は生き延びている。それに、鎧魚はなぜ、あの小さなハチドリの頭を埋めるだけではなく、まるでその復活に怯えるように、わざわざ大きな岩をその上に置いたのか。「帰還者／幽霊の邦(pays des revenants)」に帰還するのは、迂回ののちに帰還する島の知識人たちだけではない。彼等にもまたとり憑きつづける、ハチドリと蛙に、いまいちど思いを馳せてみたい。

星埜 守之 (東京大学)

エメ・セゼール小特集

去る2013年は、マルチニック島出身のフランス語詩人エメ・セゼールの生誕百年にあたります。これを機に本号ではセゼール小特集を組み、これまでセゼールの諸作品に関わりの深い研究を続けてこられた皆さまより、ご寄稿いただきました。

セゼール作品に現れる多元的世界—戯曲『クリストフ王の悲劇』から—

尾崎 文太

昨年は、エメ・セゼール生誕100年にあたる記念すべき年であった。そのような節目の年に、フランスでは『コンゴの一季節』が、そしてアフリカの複数の国で『クリストフ王の悲劇』が上演された。わたし自身、現地でこれらの舞台を観られなかったことは悔やまれるが、『クリストフ王の悲劇』という戯曲には、長年魅了され続けている。

独立後のハイチを舞台としたこの作品の魅力は、ひとことでいえば、その多元的な深みにあろう。ここでは、セゼールの詩人としての言葉の力が最大限に発揮されていると同時に、観客は、彼の民族学者・歴史家としての博学に魅了され、その政治的メッセージから脱植民地化の問題の大きさを知る。多くの論者が、この作品を評する時、政治的次元と詩的次元が高いレベルで結合していることをあげる。もちろんわたしもそのような分析に異を唱える気はないが、さらにこの作品を楽しむには、戯曲の具体的な細部から立ち現れる緻密な、魔術的とすら呼べるようなリアリティにまでアクセスする必要がある。そこには、深く、多元的な世界が広がっている。

たとえば、音楽や言語の側面から考えてみよう。一般的にセゼールはクレオール語に対して否定的な態度をとったとされるが、この作品では、登場人物たちが多くのクレオール語の歌を歌う。たとえば、第3幕第6場でクリストフ夫人が歌うのは、ヴードゥーのダンバラ神を称えるハイチの民謡である。わたしはこの民謡の古い録音を聞いたことがあるが、その土着的な雰囲気は、いわゆるセゼールのネグリチュード詩に特有の炸裂するリズムとは別種の崇高さを持っていた。一方で、第3幕第1場の宮廷のシーンでクリストフ王が歌う歌は、18世紀の作曲家グレトリの歌劇からの引用である。それは、フランスの復古王政の時代に旧体制を懐かしんでさかんに歌われた曲だが、ハイチの王宮でクリストフ王がそれを歌うという設定がまた面白い。さらには、第1幕第1場の市場の場面では、ハイチの民衆の言葉の中にスペイン語語源の現地語が多く登場する。このことによって、「フランス」と「アフリカ」に起源を持つハイチという二元論的な世界観に、別の角度からの深みが加わる。このように、本作品で使われている音楽や言語だけとって、さまざまなレベルでの多様性を味わうことができる。

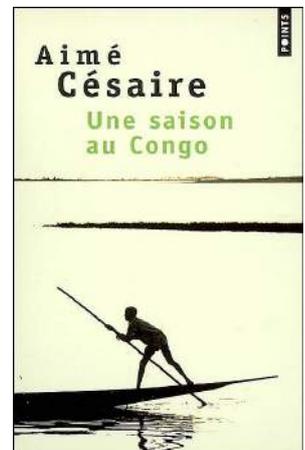
2008年のセゼール逝去、そして2013年のセゼール生誕100周年を期に、新全集や政治演説集、新たな書誌などの刊行が相次ぎ、セゼール研究は多くの新しい展開を見せている。そのような動きの中で、「ネグリチュードの詩人」「マルチニックの海外県化を実現した政治家」といった従来の典型的イメージをよい意味で打ち破り、さらに多様で豊穡なセゼールの仕事の本質に迫る研究が望まれる。もちろんその中で、セゼールの戯曲に関する研究も重要な意味を持つことは言うまでもない。

なお、蛇足ながら昨年発表された『クリストフ王の悲劇』の邦訳に関してひとこと言うと、わたし自身も訳者の一人として関わっていたのだが、予期せぬトラブルから、非常に不自然な形で出版となってしまった。セゼールという作家、そしてハイチという国の持つ固有のコンテクストへの敬意をきちんと示すという意味でも、本来用意していたヴァージョンをいずれ発表したいという希望は捨てられないが、とはいえ、2013年という年にセゼール演劇の代表作が日本語で読めるようになったという事実は、素直に喜ぶべきであろう。

『コンゴの一季節』観劇報告

佐々木 裕子

2013年10月25日(金)、リヨン郊外ヴィルールバンヌにあるTNP (Théâtre National Populaire)へ、エメ・セゼール原作『コンゴの一季節』の演劇を観に行ってきた。TNPでは、既に5月半ばから6月初旬にかけても上演されており、今回で2シーズン目の上演である。25日は、最終日だったせいか667席ある会場が、ほぼ満員となっていた。グアドループ島出身の作家で、セゼール他カリブ海文学に関する本を数々編集しているダニエル・マクシマンも助言員としてこの演劇に関わっている。クリスティアン・スキアレティ演出による上演時間2時間半に及ぶ『コンゴの一季節』は、舞台中央に描かれた円の中でストーリーが展開し、舞台後方にピアノ、ベース、パーカッションと女性シンガーが配置され、音楽あり、ダンスありのスペクタクルとしてとても楽しめる演劇だった。舞台裏はなく、両脇にすべての登場人物が舞台中央に向かってビールケースに座っていて、役の出番を待つ傍らコンゴ大衆としての役割をも果たしていた。黒人の登場人物は、訛りの効いたフランス語を話し、白人の登場人物は、ベルギー訛りのフランス語を話す。観客に向かって語りかけるときは登場人物たちの訛りがとれていているなど、言葉が巧みに使用されていた。さまざまなフランス語の言葉の響きが、舞台上では異なる文化背景をはかる道具として、舞台と客席をつなぐ道具として機能していて興味深かった。時に音楽は、詩人セゼールを代弁しているようでもあり、舞台中央で登場人物たちの政治的な会話が繰り返り広げられている場面の後方からは、ポリュームを抑えた音楽と女性シンガーの声が響き、ポリティックとポエティックが共存する重層性を帯びた劇空間となっていた。コンゴ独立の歴史とその独立運動の指導者パトリス・ルムンバを主人公のモデルとしてセゼールが描いたこの作品。史実ではルムンバは暗殺され、1965年には、クーデターをおこしたモブツの独裁政権が誕生する。興味深かったのは、演劇の最終シーン、1966年キンシャサでの独立式典の場面である。セゼールの戯曲作品では、独立式典の場で大衆の声「モクツ万歳！」と「ルムンバ万歳！」が対立した後にモクツが現れ、ルムンバ万歳と叫ぶ大衆に向かって軍が銃を連射しあちこちに死体が転がるという状況設定で終わる。今回の上演では、役者たちの「モクツ万歳！」と「ルムンバ万歳！」の声は、それまでの感情豊かな声とは異なり淡白な声になっていた。モクツが現れたあと、舞台は暗くなり終幕を告げる観客の拍手喝采となった。会場からの拍手はセゼールが状況設定で描いた軍の銃声と重なり合っ会場中に響き、拍手をすればするほど観客が暴力性を帯びた状況を提示し、観客から発せられる音が劇の一部として構成されていた。



Une Saison au Congo, Seuil.

スリジー・ラ・サールにおけるエメ・セゼール生誕100周年記念コロック

立花英裕

生誕100周年をこれだけ祝われた詩人も少ないのではないだろうか。インターネットで検索すると、2013年は、ほとんど毎日と言っていいほど、世界中のどこかでエメ・セゼール生誕100周年関連の催しがあったことが分かる。詩人という枠を越えた、象徴的な存在としてのセゼールの大きさを印象づけるものだった。セネガルでは、3月20日「国際フランコフォニーの日」から3日間にわたって著名政治家も交えた大がかりなコロックが催されている。マルティニクでは年間を通して様々なイベントが続いていたが、6月23日から27日にかけては、デレック・ウォルコットも招かれたコロックが開催されている。その他、パリ市庁など、フランス各地でも数多くの企画が実施されている。日本では、11月にフランソワーズ・ヴェルジェスを招いて日仏会館で開かれた講演会、および若手研究者セミナーがあったくらいだった。

ここでは、スリジー・ラ・サールでのコロック« Aimé Césaire 2013 : La Parole due »を報告したい。コロックのタイトルを日本語にするのは難しいが、意識すれば「エメ・セゼール2013年、贈られた言葉」だろうか。企画・準備は、最近、活躍のめざましいアンヌ・ドゥエール＝バニー(Anne Douaire-Banny)と、パリ第4大学教授・国際フランス語圏研究センター所長ロミュアル・フォンクア(Romuald Fonkoua)によって進められた。参加者は、フランス、アフリカ(セネガル、カメルーン、ナイジェリア)、イギリス、アイルランド、アメリカ合衆国、ハイチ、ベネズエラ、ポルトガル、日本など多彩な顔ぶれだった。日本からは一橋大学名誉教授恒川邦夫氏と筆者が参加した。筆者は、いわば飛び入りで翻訳をテーマにしたターブル・ロンドに参加したが、恒川氏は« Fanon et Glissant, deux versants du volcanique Césaire »と題して発表を行った。

全体としては、詩作品を中心に、演劇、散文、芸術論、関連映画も取り上げられ、セゼール文学の全体像を、今日的な視点から問い直すコロックだったと言えるだろう。「ハチドリの話」のような民話など口承文化との関係を論じる比較的若手の発表も目立った。

もう一つ興味を惹いたのは、リリアン・ケストロー(Lilyan Kesteloot)の発表だった。進行中のセゼール全集の編集方法を手厳しく批判するものだった。彼女は、ルネ・エナーヌ(René Hénane)、ママドゥー・バ(Mamadou Ba)らと共に全集編纂に加わったが、方法的な対立のため離脱を余儀なくされたとのことである。現時点では、ジェームズ・アーノルド(James Arnold)による全集が既に出版される一方で、ケストローらのグループによる新しい校訂版も幾つか出ている。序文・注も含めて両者を読み比べると興味尽きない。フォンクア教授によれば、ケストロー版の方が優れているとのことだが、こちらは全集ではないし、研究者としては、二つの版から一層多くを学べることは確かである。

今回のコロックで筆者が改めて確認したことは、アフリカにおけるエメ・セゼールの存在の大きさである。ネグリチュードを振り返るためだけでなく、今後、中東地域やアフリカから出てくるだろう未来の文学者や思想家を理解する上でも、エメ・セゼールをじっくり読み直す必要があると感じた次第である。



Château de Cerisy-la-Salle
(撮影: 立花英裕)

特別インタビュー

今号では特別企画として、作家のルネ・ド・セカッティ氏のインタビューをお届け致します。聞き手は早稲田大学の立花英裕先生です。

植民地主義と戦った詩人ジャン・セナック —ルネ・ド・セカッティ氏に聞く—

—セカッティさんは、この4月、アルジェリアでジャン・セナックJean Sénacのシンポジウムに参加したそうですね。

ルネ・ド・セカッティ(以下 RDC): ええ、アンスティエュ・フランセの招きで、アルジェ、オラン、トレムセンの3都市で開かれたコロックに参加しました。セナックの専門家ハミッド・ナセル＝コジャHamid Nacer-Khodjaの尽力で実現したコロックで、どこでも盛況でした。いまでもジャン・セナックをよく覚えている人がたくさんいるのです。

—セカッティさんはチュニジア生まれですね。隣国アルジェリアにどんな印象を抱かれましたか。

RDC: フランス語を話せる人が際立って多いですね。12歳の女の子が完璧なフランス語を話してくれたのでびっくりしました。ちょうど大統領選挙中で警官の姿が目立ちましたが、どこに行っても街は平穏でした。観光色もあまりありません。

—昨秋、ジャン・セナックの本格的な伝記が出ましたが、どのような経緯だったのでしょうか。

RDC: 詩人ベルナル・マゾ(Bernard Mazo)が私に原稿を送ってきたのです。私が1999年にセナックの詩の全集を出版していたからでしょう。不幸なことにマゾはまもなく亡くなったのですが、コジャの協力でスイユ社から刊行できました。

—セカッティさんはセナック関係の出版をずいぶん手がけていますね。なにか切掛けがあったのでしょうか。

RDC: 詩人の存在を最初に教えてくれたのは、セルジュ・タマニヨ(Serge Tamagnot)です。1973年にジャン・セナックの詩集をプレゼントしてくれて、すぐに、この詩人が好きになりましたが、その年の8月30日、突然殺されます。若い男娼が逮捕されましたが、まもなく釈放され、事件は迷宮入りしました。背景には、1965年の軍事クーデター以降、詩人が政権から遠ざけられていったことがあります。

もう一つの切掛けは、1982年にラバハ・ベラムリ(Rabah Belamri)*と知り合ったことで、ベラムリは詩人を賛美していました。後に『ジャン・セナック 欲望と苦悩に挟まれて』(Jean Sénac, entre désir et douleur, 1989)を出しています



René de Ceccatty スイユ社にて
(撮影: 立花英裕)

—ジャン・セナックは日本ではあまり知られていないのですが、どんな詩人ですか。

RDC: アルジェリアでは自由と友愛の詩人として大変尊敬されています。1926年生まれで、母親はスペイン人です。父親は誰か不明で、というより、現在は分かかっていて、実は、近所のスペイン人の男に強姦されて生まれた子なのです。彼は、ある日、母親の書いたノートを読んで真実を知ります。セナックという苗字は、母親が再婚したフランス人から来ています。セナックは、自分をアルジェリアの詩人と見なしていましたが、アルジェリアでもアルジェリア詩人として読まれています。しかし、アルジェリア国籍は取得できませんでした。ロルカと比較する人もいますが、ホモセクシュアルな愛を歌った詩人でもあります。文学的交流の広がった人で、アルベール・カミュやルネ・シャールとも親交を結んでいました。1954年から62年にかけてはフランスに滞在し、執筆・出版活動を通してアルジェリアの独立を訴えます。「精神的な養父」カミュとは仲違いしてしまいましたが、フランスの知識人をアルジェリア問題に目覚めさせるのに貢献しました。

— どうもありがとうございました。

(聞き手: 立花英裕)

*鶴戸聡氏がBelamriの傑作『傷ついた眼差し』を翻訳している(『イスラム世界研究』第3巻1号, 2009年7月)

会員紹介

日本フランス語圏文学研究会のメンバーを随時紹介していきます。新たなメンバーの入会を募集中ですので、関心ある方はご連絡ください。

一條 由紀 ICHIJO Yuki

専門：19世紀フランス文学、特にロートレアモン
所属：北海学園大学経済学部准教授
連絡先：profondorosso@jcom.home.ne.jp

19世紀フランスの作家に分類されるロートレアモン(イジドール・デュカス)の研究をしています。博士論文では、特に『マルドロールの歌』に見られる大衆小説的要素の分析を行いました。

2013年度までは早稲田大学などで非常勤講師をしていましたが、2014年春から北海学園大学で教鞭を執ることになり、二十数年ぶりに故郷である札幌に戻りました。昨年スタージュでモンレアルを訪れて以来特にケベックに興味がありますが、北海道に戻ったことを機に、これからはケベックのみならず広く北方文化圏に関心を持って研究を続けたいと思います。ケベックについて言えば、特に移民の出自を持つ作家たちに注目しています。

私がかつともロートレアモンに興味を持ったのは、彼の作品に見られる「アイデンティティの揺らぎ」の表現に惹かれたからでしたが、デュカスもフランスから南米ウルグアイに移住した両親のもとで生まれた「移民作家」でした。今後、ケベック文学研究とロートレアモン研究をうまく接続させることができると考えています。フランス語圏文学についてまだまだ知識不足ですので、この会で勉強させていただければ幸いです。

西川 葉澄 NISHIKAWA Hasumi

専門：19世紀フランス文学（特にロートレアモン）、フランス語教育
所属：国際基督教大学

ロートレアモン研究を続けてきました。ICUではフランス語を教えています。ロートレアモンを読めば読むほど、フランスの外部にあるフランス語がどのようにフランス語を用いてフランスとその固有の文化に逆襲しようと試みるのか(言い過ぎでしょうか)という過程に興味をわき出します。数年前ウルグアイを訪れた時に、ロートレアモン伯爵ことイジドール・デュカスが生まれ育ったモンテビデオ旧市街は今でこそ廃墟のようですが、かつてはまさしくヨーロッパの延長に違いない華麗な都市の面影を見て、フランスのさえない田舎町で中等教育を受けた後、単身パリに上京したロートレアモンの胸中を想像し、旅の醍醐味を味わいました。旅と言えば、ダニー・ラフェリエール『帰還の謎』を読んでモンレアルで冬を過ごすことがどんなものだったかを鮮明に思い出しながら、こんな言葉にしばれました。Si on veut vraiment partir il faut oublier l'idée même de la valise. どうぞよろしく願いいたします。



トゥールーズ (撮影: 廣田郷士)



吉田 朱美 YOSHIDA Akemi

専門：19世紀英語圏文学
 所属：名古屋工業大学 つくり領域
 連絡先：yoshida.akemi@nitech.ac.jp

学部の卒業論文でトマス・ハーディの小説*Tess of the d'Urbervilles* (1891)を扱って以来、後期ヴィクトリア朝を中心とする時代の英語圏の小説作品を主な研究対象としております。

最近の自分の研究はなぜかファースト・ネームが「ジョージ」である作家たちに偏っています：ジョージ・ギッシング(1847-1903)、ジョージ・ムーア(1852-1933)、ジョージ・エジャートン(1859-1945)——これらの作家はいずれも、キリスト教の信仰を失った不可知論者です。後期ヴィクトリア朝は、1859年に出版されたチャールズ・ダーウィンの『種の起源』や、それに先立つライエルらの地質学上の発見の影響もあり、聖書の記述を文字通り信じていいのだろうかという疑念を多くの人たちが持つようになった時代でした。

そういった状況のもと生まれた小説作品の中に描かれている動物たちの姿はいったい読者に何を教えてくれるのだろうか、というようなことがこのところ、気になっています。



ジョージ・ムーア墓碑
 アイルランド(撮影: 吉田朱美)

村田 はるせ MURATA Haruse

専門：アフリカ文学
 経歴：東京外国語大学博士後期課程修了
 連絡先：tamtamahara@yahoo.co.jp

私はフランス語で書かれたアフリカ文学を学んできました。そうした文学の書き手は、かつてフランスやベルギーの植民地だったアフリカ諸国の出身です。これらの作家の特徴は、例外もあるでしょうが、互いのつながりが強く、出身地やアフリカ全体の社会問題・時事問題に強い関心を寄せていることです。そのため、現在の私の関心もルワンダのジェノサイド、コートジボワールやコンゴ共和国などの内戦をそうした作家たちがどのように書いてきたか、書くという営みをどう考えているかです。それぞれの土地に生きる人間の日常の仕草や眼差し、自然の特性に寄り添った表現にはとくにひかれます。アフリカの多くの国では、本はいまだにぜいたく品ですが、そうした表現が後々に残り、いつの日かより多くのアフリカ人に読まれることを願っています。私としては、そうした作品を読み解くためにも、描かれた地域ひいてはアフリカ全体の歴史・文化(言語や料理、おしゃれも)についてできる限り多くの知識を持ちたいと考えています。また、学んだことを伝え、アフリカは私たちの日常やこの国の政策と無関係ではないことを感じてもらおうと、地元富山で市民向けの「アフリカ講座」や読書会を企画・開催することにも取り組んでいます。

新刊紹介**大辻都****『渡りの文学 カリブ海のフランス語作家、
マリーズ・コンデを読む』（法政大学出版）**

マリーズ・コンデの作品の魅力と問題提起は何だろう。そのひとつは父系物語がドミナントであるカリブ海文学のなかに母-娘や乳母といった母系・女性の物語を滑り込ませるインパクトにあるだろう。父系物語、というよりも父系の機能不全といったほうがより正確であろうカリブ海の社会状況を反映するストーリー・テリングのなかに一貫して表明される、ある種の「違和感」。それは男性優位の語りや大きな物語ないし理論的ディスクールへの不信感ともいえるだろう。カリブ海、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカの往還のなかに生きるディアスポラ作家が共同体を描くときの、そうした「よそものの眼差し」を大辻都は見逃さない。「自分の名前をほしがろうとはしない小説」はアナンシ(蜘蛛)的な網状のラインをそこかしこに伸ばし、民話の語りをも取り込んで、生者と死者との敷居をも軽々と踏み越えて、いくつもの世代の連鎖を語り紡いでゆく。『渡りの文学』はマリーズ・コンデの文学世界へのこの上ない招待状であるばかりでなく、その文学に流れ込んでいるさまざま先行作品の魅力的な読書ガイドとなっている。本書の読者は、シュザンヌ・ラスカラードやシモーヌ・シュバルツバルトを読んでみようときっと思うことだろう。さらに、コンデの作品をさまざまな声の断片の響きが積み重なる「微弱なポリフォニー」と評する大辻の指摘は、作家個人の特徴を越えて、越境をこころみる現代文学が企むひとつの詩学とその詩学が体现するひそかな力をはからずも的確に言い当てているようにも思われる。

(工藤 晋)

日本フランス語圏文学研究会会報
第3号 2014年4月30日刊

日本フランス語圏文学研究会

早稲田大学法学学術院立花研究室

(早稲田キャンパス8号館712号室)

〒169-8050

東京都新宿区戸塚町1-104

HP:

[http://litterature-
francophone-2012.blogspot.jp/](http://litterature-francophone-2012.blogspot.jp/)

Mail:

miyakoo385@hotmail.com

★編集後記

新年度が始まりましたが、いかがお過ごしでしょうか。今号も、無事お届けすることができました。巻頭言を寄せてくださった星埜先生をはじめ、多忙をぬってご寄稿いただきました執筆者の皆さまがたに、心より感謝申し上げます。

先日大学院のある授業で、サルトル「黒いオルフェ」を読む機会がありました。黒人文学論の古典ともいえるこの評論を読み直して考えたのが、ネグリチュードの「戦略」としての側面と「本質」としての側面の二つを、サルトルは—そして恐らくはセゼールもまた—見通しているという点です。その後続く作家らのネグリチュード批判が特に後者の側面、黒人作家にとっての「神話」としてのネグリチュードを対象としているのであれば、セゼールにとってのネグリチュードとははたして何でありまた何でなかったか、「かつてより単数形で存在してこなかった」(真島一郎)ネグリチュードに賭けられた争点とその意味を、セゼールの詩を通じてもう一度捉えなおす必要があるのではないかと感じました。

(廣田 郷士)



パリ (撮影: 佐々木裕子)